京三中・山城高同窓会　会誌

双ヶ丘

第 10 号　2016/02/29

●表紙の作品　河合美佳 画 『水路閣』の紹介

私が好んで作品にしている題材で多くを占めているものといえば、レンガです。今回『双ヶ丘』の表紙に使って頂いた『水路閣』も、その連作の一つ。第34回日展（日本画）にも入選した150号（170cm×220cm）の大作です。

自宅近所のレンガの建物から始まり、レンガ好きということで、色んな方々から、レンガのある場所を教えてもらいました。そのうちの一つ、南禅寺の水路閣を描いたものです。テレビドラマや京都観光名所としてもかなり有名な所です。現場には足繁く通い、あらゆる視点から作品にしてきました。とはいうものの、通うたびにその魅力は深まるのですが、さて、絵にしようとすると、思った以上に構図が難しいのです。

表紙の作品は、ふと、一息ついて休憩した所での出会いでした。トンネルを幾重にもくぐるような不可思議な空間に吸い込まれていったのです。知らず知らずに通り過ぎていた所に、これだっていう世界が見えたのです。制作過程では、迷うことなく描き進めることができました。感動が一心となって画面を埋めていったのです。有難いことに、そんなこんなの制作との日常が今も続いています。

四六時中、新鮮な出会いに感動できるよう、絵心のアンテナを立てることを忘れないよう心掛けています。２０１６年も作品を発表する機会がいくつかあります。どこかで、私の作品や名前を見かける事がございましたら、『双ヶ丘』を通じてのご縁を大切に、身近な存在として関わって頂ければ幸いです。

『双ヶ丘』第8号に続き、今回も表紙に使って頂けて、とても嬉しく思います。どうも有難うございました。

河合美佳　略歴

山城高校第36回卒業。
京都市立芸術大学 大学院 修了。
現在、日本画家として活動。
日展所属。京都日本画家協会会員。京都市立芸術大学美術教育研究会会員。
「絵画教室 カワイ」主宰（日本画、水墨画、鉛筆デッサン、水彩画、仏画等を指導）。
２０１３年、山城高校に第28回日展入選作品『門』を寄贈。

巻　頭　言

会誌『双ヶ丘』

京三中山城高校同窓会
会長　森　貞男

京三中山城高同窓会誌『双ヶ丘』は高林藤樹（五回卒）副会長を中心に伊藤禎彦さん（十八回卒）や松村多美男さん、岡野直臣さん（ともに二十六回卒）、中村哲也さん（二十八回卒）らのご尽力によって発刊されてきました。

本年の同窓会総会で会誌『双ヶ丘』は同窓会行事として毎年発刊することに決まりました。

同窓会員の皆さん、特に若い世代の諸君には身近な近況などを気軽にお知らせいただければより親密感が増すことでしょう。また学校の現状などもよりわかり易く掲載されることによって連携がより良くなることと期待しています。

巻頭言

チーム山城

校長　前島　巌

同窓会の皆様には、日頃より本校の教育に御理解・御支援をいただき、心より感謝申し上げます。

京都市・乙訓地域が1通学圏になり、総合選抜制度から単独選抜制度へと移行して2年目になります。今年度の卒業生は、類・類型制度で高校生活を過ごした最後の学年となりました。本校では、高校制度改革に対応するために、早期から本校の教育ビジョンを整理し、学校の使命を、「グローバル社会で活躍できる力を育み、将来、様々な分野で社会に貢献する人間を育成する」ことと捉えて学校教育を推進してきました。平成19年度から文理総合科を設置し、平成26年度から普通科にスタンダード、アドバンスト、スーパーアドバンストの3コースを設置して、学校全体で教育改革を進めています。

さて、平成27年は戦後70年の節目の年でしたが、現在の世界は歴史上これまでだれも経験したことがないようなグローバル化の時代に突入しています。様々な情報が瞬時に世界を駆け巡り、便利さや物質的豊かさが広がる一方で、環境や経済等に関する課題もグローバルな規模で増幅しています。各国が抱えている課題はもはやその国だけの問題ではなく、国を超えて人間同士が相互に協力・協働する中でしか解決できないことが沢山あります。このグローバル化の進展する時代を生き抜いていくためには、グローバル社会の現実の光と影を直視し、光の部分を大切にしながらも、影の部分が決して暗闇にならないように考えて行動しなければなりません。

将来、社会のどの分野に進んでも、それぞれの立場で様々な課題を認識して解決していくことになります。そのために必要な判断力や行動力は、多感な高校時代において大きく発達します。まず、様々な事象の表層から深層までを多面的に観て課題を認識し、次にその課題を解決する道筋を多角的に考えて判断し、そして人と協力しながら実際の行動に移していく。このようなことは、自由な発想や失敗等が許される学生時代だからこそできる経験であり、様々なことにチャレンジすることによって「人間力」を高めることができます。本校では、どの生徒にもハイレベルな文武両道を通じてこの「人間力」を鍛えてほしいと考えています。

文武両道の「文」においては、文系と理系の学びを併せもった教育を通じてリベラルアーツの精神を育み、思考力や判断力、行動力を伸ばすことを学校とし

てめざしています。そのために、本校では「山城高校アカデミックプロジェクト」と名づけた教育実践プログラムを組み、特色ある教育に取り組んでいます。サイエンスの分野では、日本の大学で研究に取り組んでいる海外の研究者を招いて講義を受けています。人間探究の分野では、「連歌」の実作に取り組みながら日本文化の心を体験的に学んだりしています。また、今年度も、京都府教育委員会の研究指定を受け、「グローバルネットワーク京都」の論文コンテストや、ポスターセッション、プレゼンテーションに参加しています。国際交流の一環として毎年AFSの交換留学生を受け入れており、ノルウエーの留学生の帰国後には、新たにベルギーからの留学生が本校で学んでいます。本校からは、ベルギーとイタリアに1名ずつ留学しています。また、12月には、中国高校生訪日団の生徒14名と交流を深める機会がありました。さらに、今年も京都府教育員会の支援を受けて、エジンバラ語学研修に2名、オーストラリア語学研修に1名、短期留学に4名が参加するなど多様なグローバル活動にチャレンジしています。

文武両道の「武」は、部活動やホームルーム活動、学校行事等の学業以外に取り組むプラスα（アルファ）に当たるものです。部活動については、本年度も86％の生徒が取り組んでおり、ハイレベルな文武両道をめざして学習と部活動の両立に汗を流しています。今年度の成果としては、近畿で開催された全国インターハイに弓道部の女子1名と水泳部の女子1名が出場し、弓道は決勝まで進出することができました。また、ラグビー部の全国高等学校合同チーム大会に近畿ブロック代表として男子1名が選ばれて出場することができました。テニス部は近畿公立高等学校テニス大会において連覇を果たしています。ダンス部は今年も日本高校ダンス部選手権に出場し、ビッグクラスで特別賞を受賞しました。

山城高校には、学校を愛する心や伝統を大切にする心と共に、新しい道を切り開いていくパイオニア精神が息づいています。これまで大切にされてきた自主・自立・共生の精神と共に一つになって「山城スピリット」としていつまでも引き継がれていくことを願っています。山城高校に入学した生徒一人ひとりが「チーム山城」の一員として高め合い、卒業後も生涯にわたって「山城高校」の絆でつながっている学校であり続けたいと思います。

同窓生の皆さまにおかれましては、ますますの御発展をお祈り申し上げますとともに、これからも「チーム山城」への御支援をよろしくお願いいたします。

目　次

巻　頭　言 …… 京三中山城高校同窓会　会長　森　　貞男 …… 1
チーム山城 …… 校長　前島　　巌 …… 2
漕艇部入部二ヶ月で吃音直る …… 三中・36回　髙須壽一 …… 5
学徒勤労動員の歌 …… 三中・38回　金山政喜 …… 7
「能」について …… 三中・38回　髙林藤樹 …… 8
一海君を悼む …… 三中・38回　髙林藤樹 …… 11
百十一才まで生きよう会 …… 山城・11回　小渕　稔 …… 12
Road to Boston …… 山城・15回　伊藤浩介 …… 12
山城高校バドミントン同好会・誕生噺 …… 山城・18回　髙橋博道 …… 15
野菜作り雑感 …… 山城・18回　寺島竹夫 …… 17
故テレサ・テンを偲び　台湾・玉山に登る …… 山城・18回　中尾四郎 …… 18
68歳のボウリング教室 …… 山城・18回　中尾四郎 …… 19
同級生五人で初冬の越前旅行 …… 山城・18回　中尾四郎 …… 20
青春十八切符で善光寺秘仏ご開帳の旅 …… 山城・18回　松木利夫 …… 21
雑　　感 …… 山城・19回　石川　勉 …… 25
変わらぬ風景 …… 山城・19回　酒井正明 …… 26
サッカーは人生となりました …… 山城・19回　鈴木貞雄 …… 27
随　　想 …… 山城・19回　谷利幸雄 …… 29
ベルリン観光 …… 山城・19回　中村美知子 …… 29
第1回たんぼラグビー in 京都・福知山 …… 山城・38回　中西一喜 …… 30
社会に出たって山高生 …… 山城・61回　吉川晟史 …… 31
ハガキによる会員からのたより …… 32
各期・各会の報告 …… 36
同窓会ホームページのご案内 …… 38
『防人の詩』 …… 39
紙媒体で紹介された母校 …… 40
「やましろスクールライフ第1・2号」より …… 42
クラブ活動 …… 46
寄付者芳名 …… 57
訃　　報 …… 57
強い同窓会をつくりましょう …… 編集部　髙林藤樹 …… 58

（おことわり：本文中特に表記がない場合は原稿作成時の年月です。）

漕艇部入部二ヶ月で吃音直る

当時の状況とボート部の歌の回想

三中・36回　高須　壽一

小学校5年ごろより発音先頭語が「の」及び「な」のつく言葉は吃って困っていた。少年倶楽部の記事で、昔のギリシャの哲人ソクラテスなど有名人も吃音に悩み、直すため海や山に向かって大声で発声練習をしたとあり、私も衣笠山の麓で大声を発し練習するも、人と話をすると、あせって吃ってしまった。

当時、京都市電は6銭で切符を買うと目的地まで乗り換えて行けたが、乗換駅で切符を見せ「乗り換え」と言うのを「ののののりかえ」と吃ってしまい、発声前は胸がどき〳〵し困っていた。

昭和15年三中入学。8月に漕艇部に勧誘され9月より放課後バック台で練習させられた。座る席にはseatと言う座布団が敷かれるも、席の前に尾骶骨をひっかけて座り、足の踏み板に二つのstrapと呼ばれる皮バンドに足首を入れ、後へ漕いで戻す時、これで上体を起こした。初めは30本漕がされ、思い切り息を吸い両手を前に出し後ろへ引き、又前へ上体を戻すのだが、腹筋と尻が痛く、その後、stretchで、両手を頭の後ろで組み上体を前へ倒し、力を抜いて水平になるまで後ろへ引き、筋肉をほぐすのだが、これだけでふら〳〵になり、尻の皮は破れ肉もただれ、帰宅後メンソレータムを塗りガーゼを当てていた。一人前になったときは３００本漕いだ。現代の装置は、調整可能な漕ぐ時と同じ荷重が手・腕にかかるようになっている。

前年までは、琵琶湖の柳が崎沖で全日本中等学校漕艇大会が開催されていたが、食糧難のためか中止され、三中の琵琶湖周航も中止されていた。

日曜日には京津三条駅へ集まり、電車で浜大津駅まで乗り、それから三井寺下の近くまで歩き、京都へ湖水を流す疏水の取入口の橋の手前にある桑野造船へ行き、乾燥のため預けてあるシートとストラップを取りに行くが、行く時、戻しに行く時、時間を見計らったように大津高女の同年配と思われる女性が待っていて、ニコニコと対応してくれた。

橋を渡り、すぐ右へ曲がると、まず三高の艇庫、隣が二中、少し歩いて三中の艇庫があり「きたの」「ひらの」「さがの」と名付けられた固定席艇Fixがあり、隣の艇庫は三中の旧艇3隻を大津商業に貸していた。その先の岬の先端に、竹清楼と看板を掛けた料理旅館と思われる大きな建物があった。

「さがの」を湖水に浮かべ、先輩の指導で午前中は舵手…Coxをやらされ、頭にメガホンをかぶり大きく息を吸い号令した。「All men take oar」皆オールを持て。「Ready row」用意漕げ。「Squrt 30本」全速力で力漕30本。「Constant pitch」普通の速さに。「Easy oar」漕ぎ方止め。操舵法と共に号令のかけ方を教わった。

午後は船首のBowと呼ばれる左側のオールを漕がされた。近江八景の一つで、芭蕉が「唐崎の松は花より朧にて」と詠んだ唐崎にも立ち寄り、堅田の浮御堂近くまで行った。そして2か月たったら吃音が直っていた。

堅田の浮御堂

11月3日（当時の明治節）の漕ぎ終わりで5年生は引退するが、この日は艇に帆を積み込み、風が出てきたら帆を張り、ズデン・ズデンとPitching…縦揺れしながら進む帆走を楽しんだ。

その後も放課後のバック台練習は続き、2年の4月初めの日曜日は、桜満開の瀬田川へ。唐橋の下を通り石山寺周辺へ上陸し、食堂で6銭の瀬田しじみ汁を注文し弁当を食べた。

石山寺には、紫式部が源氏物語の構想を練った源氏の間があり、ここからの眺めは絶好景だった。更に南下して南郷の洗堰へも行った。ここから落ちる水は宇治川となる。

昭和26年3月10日の朝刊で、私の視点欄に大阪の支援学校教員の記事があり、吃音への理解「劣ったもの」ではない…の見出しで同年1月28日吃音を苦に若者が自殺した。「吃音が社会に理解されること」が緊急の課題と記載された。私は新聞の声欄係へ葉書を書き、吃音は直す方法がないとあるが、私はボートで吃音が直った。自分は、こうして吃音が直った又は直したの記事を募集し記載せよと述べるも無視された。命にかかわる事なのに新聞社の対応に失望した。

現代のボートはスライディングシートのみになったが、我々の時代、中学・高校は固定席で、舵手1名、漕手6名、船首側艇内に一つの席あり、船首・船尾の甲板にそれぞれ2名ぐらい乗れたので、計12名は乗れた。

明治38年生まれの私の母は「真白き富士の嶺（ね）」を愛唱していたが、交通新聞社発行の月刊誌ジパング倶楽部に10年前より「名曲の舞台を訪ねて」の連載記事の1番目に取り上げられ、28番目に、「琵琶湖周航の歌」あり。

「真白き富士の嶺」の説明では、明治43年1月23日逗子開成中学校ボート部員がボート「箱根号」を無断で海上に漕ぎ出し部員11名と部員の弟の小学生1名が鎌倉の七里ヶ浜沖で遭難。事故に心を痛めた姉妹校の鎌倉女学校教師の三角錫子（みすみすず）は、その夜のうちに鎮魂歌を作り、曲は女学生用の唱歌教材「夢の外（ほか）」（大和田建樹作曲）という外国曲で、アメリカの作曲家インガルスの作とある。この歌は別名「七里ヶ浜の哀歌」とも言う。

昭和39年に関係者が七里ヶ浜にほど近い稲村ヶ崎の海浜公園にボート遭難碑を建立。部員の徳田勝治が弟をしっかり抱いて江の島を仰いでいるブロンズ像で、下の台石に、この歌が彫られている。像の写真を撮るも、歌は凹みが陰（かげ）になり判読不明。江の島と富士も離れすぎるため一枚の写真に入れるのは無理だった。

この歌は六番まであるが、一番は、

一、真白き富士の嶺　緑の江の嶋
　仰ぎ見るも　今は涙
　帰らぬ十二の　雄々しきみ霊（たま）に
　捧げ奉（まつ）る　胸と心

鎌倉より南東にある逗子開成学園に行くと、門のすぐ近くに歌詞を刻んだ横長の石碑とブロンズ製の折れたオールのオブジェあり、写真を撮るも、彫られた文字は判読不能。ここより北西にある披露山より撮った江の嶋と富士は、うまく写真に入った。

披露山より見る江の嶋と富士

「琵琶湖周航の歌」の説明では、三高ボート部は毎年琵琶湖周航をし、部員は数艇のボートに分乗して3泊4日ほどかけて湖を一周した。大正6年、部員の一人、小口太郎が宿泊地の今津で以前より温めていた、この歌を完成し仲間に伝え、別の部員が「ひつじぐさ」（吉田千秋作曲…千秋が英詩を翻訳して賛美歌の影響を受けた曲をつけた…）を用いたとある。

歌は六番まであるが、私は二番が好きだ。

二、松は緑に　砂白き
　雄松が里の　乙女子は
　赤い椿の　森蔭に
　はかない恋に　泣くとかや

松の緑、砂の白、椿の赤、乙女心の灰色。

この歌は、今では滋賀県民歌となった。我々が前を通った三高艇庫は保存活用され、前に歌碑がある由。周航で回った南小松、今津港、竹生島港、近江八幡、彦根城にも歌碑あり、今津では、この歌のコンクールがあり、学生、父兄、女性らのグループが歌っている由。

私が三中二年の昭和16年春、金沢の四高ボート部が今津沖と思われる場所で遭難し全員死亡。すぐにラジオで歌手の東海林太郎、小笠原美都子の両名による「琵琶湖哀歌」流れてきて、私の漕艇部入部を心配していた母をます〳〵心配させた。この歌（奥野　椰子夫　作詩　菊地　博　作曲）を説明した本はないようだ。歌は四番まであり、一番は、

一、遠くかすむは彦根城
　波に暮れゆく竹生島
　三井の晩鐘音絶えて
　何すすり泣く浜千鳥

これらの歌を歌うたびに往時が偲ばれる。

学徒勤労動員の歌

三中・38回　金山　政喜

一　行く先は半田の新池寮
　中島飛行機製作所
　柔道畳に赤布団
　これが俺等の夢の床

二　御国の為とは言い乍ら
　人の嫌がる中島へ
　出で行く我等の哀れさよ
　可愛い彼女と泣き別れ

三　汽車の前で手を振って
　送って呉れた人よりも
　ホームの蔭で泣いてゐた
　いとし彼女が目に浮かぶ

四　月が落ちて夜が明けて
　五時に起床ですぐ點呼
　いやな仕事に身を労し
　嫌々過ごす日の長さ

五　海山遠く隔てゝは
　面會一つまゝならず
　届く便りの嬉しさよ
　可愛い彼女の筆の跡

六　これでも立派な工場か
　雨が降ればジャジャ漏りで
　工場の中は水づきで
　排水作業に日が暮れる

七　工場は嫌な水兵が
　バットを下げて廻り行く
　もしもさぼってゐたならば
　忽ち飛びくるその痛さ

八　夕日が落ちて月が出て
　やっと嬉しい自由時間

それもたった一時間で
消灯ラッパが鳴り響く

九　夜の夜中の不寝番
辛い務はすぐまわる
もしも居眠りしたならば
受けなきゃならぬその痛さ

十　工場の待遇悪いので
ホームシックが流行り出し
俄かに起こるストライキ
檐任教師が大あわて

「能」について

三中・38回　高林　藤樹

一

「能」は現今、普通には「能楽」或いは「能・狂言」などと呼ばれていますが、「お茶」や「お花」のように「お能」と丁寧に言わなければなりません。それは、徳川時代には武家式楽（ヨーロッパになぞらえるならば宮廷音楽）と位置づけられ、封建制度のもとで厚く庇護されてきたからです。

宮廷音楽としては千年以上も古くから宮中に伝わる「雅楽」があります。「雅楽」は大陸から中国・朝鮮を経て、日本に到来したものです。「能」も「雅楽」と同じく大陸から伝来したものと思われますが、いろいろな点で大きな違いが見られます。

二

さて「能楽」は、本邦第一号の世界無形文化遺産としてユネスコに指定（二〇〇一年、世界で十九件）されました。日本を代表する格式ある伝統芸能とされています。その後、二〇〇三年に文楽、二〇〇五年には歌舞伎がそれぞれ指定を受けました。

いわゆる伝統芸能と呼ばれるものが数多あるなかで「能楽」が一番に指定を受けたことに、私も能楽愛好者の一人として、喜びを感じているのですが、この芸能という呼び方には若干の抵抗があります。芸能というのは「広辞苑」によれば、演劇・歌謡・音楽・舞踊・映画などの総称とされていますが、「能」はこれらのいずれにもあてはまらないと思います。様式や構成が似ているので日本のオペラだとする人もいますが、私は反対です。

それならどのジャンルに入るかと言えば、私は宗教儀礼または拝礼作法と答えます。

三

「能」は、一般的には室町時代に観阿弥・世阿弥父子が大成したと言われていますが、突然発明したのではなく、それ以前から長い年月をかけて、次第に潤熟してきた各種芸能に、改良や工夫を加えたのではないでしょうか。いや、改良というよりも、珍奇を喜ぶ（つまり保守を喜ばない）風潮に迎合しようとして、アイデアを凝らしたのではないかと思われます。

「能」に先立つ各種芸能としては、曲舞（クセマイ）・幸若舞（コウワカマイ）・延年舞（エンネンマイ）、等々があります。さらに時代を遡れば、雅楽（ガガク）・伎楽（ギガク）・散楽（サンガク）・田楽（デンガク）等々があります。また、天台の声明も「能」に影響を与えていると言われています。

このように「能」はどこが起点か終点か、早急に断じることができないのです。又、「猿楽の能」とか「田楽の能」などとも呼ばれていました。後に「能」のことを「猿楽」といい、又は、「申楽（サルガク）」という字を当てたりするようになります。今の「能楽」は「猿楽の能」です。

四

ところで当時（室町時代）の「能」は、今の「能楽」とは随分異なったものであったと思われます。秀吉も「能」を愛好した一人として知られていますが、聚楽第において一人で一日に何番も「能」を舞ったりしています。現代の常識では考えられないことです。体力

にしても、時間にしても、殆ど不可能に近いと言えるでしょう。というより演能のやり方が異なって居たのではないでしょうか。一番考えやすいのはテンポの差ではないかということです。恐らくもっと軽妙な気楽なものだったに違いありません。当然、内容もそれに応じたものだったと考えられます。

当時、「能」の演目数は二〇〇〇曲くらいあったと言われています。二〇〇〇曲がレパートリーとして常備されていたとは考えにくく、次々に新曲が作られ、又、或る曲は廃れて新陳代謝も激しかったと思います。

五

学者の研究によりますと「能」が今の形に落ち着いたのは江戸中期頃であるとのことです。江戸中期といえば、将軍は八代目の吉宗です。吉宗は有名な「享保の改革」を実行しましたが、これは節倹を旨とするもので、色々な分野に及びました。加えて封建制度は身分だけでなく、あらゆるものに枷をはめ、進歩・改革を禁止しました。もちろん芸能・歌舞・音曲も例外ではなかったに違いありません。そのため発展や工夫は止まったかも知れませんが、反面、そのお蔭で古い姿を後世に伝えたということが出来ます。

六

明治維新の功労者である三条実美や岩倉具視らは、ヨーロッパ視察旅行より帰朝すると、それまで武家の式楽であった「能」を日本の国楽或いは宮廷音楽にしようとしました。明治十四年に華族を中心に『能楽社』を設立し、江戸時代に猿楽と呼ばれていた「能」を「能楽」と命名しました。このことは『能楽社』の趣意書に書かれてあります。『能楽社』は次いで『能楽会』となり、さらに『社団法人能楽協会』となって今日に及んでいます。又、太政官令により黒紋付きが正式の礼装と決められました。

七

室町から鎌倉・平安・奈良と時代を遡るにつれて史料は乏しくなり、辿りにくくなりますが、一つの重大な事柄に出会います。それは聖徳太子の時に「太子はこの道の廃れたことを嘆かれて、六十番の新曲を作られた」という言い伝えがあることです。このことは世阿弥の著した『風姿花伝』（花伝書）にも見えますが、室町時代では「能」はすでに本流から外れて邪道を歩んでいたことが伺えます。本流から外れることを、短絡的に邪道と決めつけるのも如何なものかと思いますが、それはそれで新しい別の道を模索しているのですから、寧ろ正道を進んでいたとも言えます。今、正邪は附けがたいとするものの、源流が宗教にあったとする立場からは、「能」は本流から堕落して（つまり宗教性を失い）来し方を忘れ、「邪道」は成長して大衆芸能という新文化を創成したといえると思います。

「本流」は興福寺・法隆寺・春日大社など畿内の有力社寺に所属して「座」というグループを形成します。その末裔は金春座・観世座・宝生座・金剛座などとして大和猿楽とか近江猿楽などと呼ばれ、今日の能楽五流の祖となります。尤も「能」を五流と数えるのは明治以後のことで、それまでは後発の喜多流を加えて四座一流と呼んでいました。余談ですが、戦後一時期、梅若流がマッカーサーの支持を得て、観世流から別れて独立しようとしたことがありましたが、結局、沙汰止みになってしまいました。これは能楽界における封建色の強さを物語っていると思います。

八

「能」の起源を辿るとついに一つの曲に行き着くことが出来ます。それが、「翁」という曲です。「翁」は「能・狂言」の中の一つの曲として他の曲と同一に分類されていますが、「能楽」現行曲二百数十番の中で、他と構成が全く異なる特異な曲です。何故一つの

分類に属しているか、不思議さえ感じます。つまり「翁」は「能楽」ではないのです。いや、「翁」だけが「能」であって、他が非なのです。

ここで「翁」が「能」であるか否かを論ずる前に、「能」とは何かを定義しなければなりません。世に「能楽」を鑑賞する人、研究する人は少なくありませんが、「能」の語義について「ノー」という発音が何を意味するのか、未だ、うまい説明を聞いたことがありません。

九

日本の古い言葉は「古事記」・「万葉集」や「祝詞」の中に見ることが出来ます。「ノー」という語は祈るとか願うなどを意味する「ノム」からきていると思います。「祝詞」には「コイノム」という言葉が随所に見られますが、これは「祈る」とか「願う」などという意味です。

また万葉集にも多くの例があります。例えば第十一巻の「わぎもこにまたもあはむとちはやふるかみのやしろをのまぬひはなし（詠み人知らず）二六六二」という歌の中の「のまぬ」も祈るの意味です。

「ノー（能楽）」を「ノム（祈り）」とするのは発音が似ているだけでなく、舞台上で演ぜられる所作・振付などの随所に拝礼作法が見られるからです。「能楽」の祖型は「翁」でありますが、「翁」に至っては曲全体が拝礼作法です。従って「能楽」は「能」であり、「能」は「ノム」であり、祈りそのものに由来しているのです。「翁」の舞台を観ていると、拝礼作法に終始しているのがよくわかります。

具体的には、お辞儀をする型や、袖を合わせたり広げたりする仕草がそれです。

十

さて、その「翁」という曲は他の曲と比べると、全く以て奇妙な曲であります。能の詞章である謡の文句は今の日本語としてはおよそ理解出来ないものです。

まず冒頭の一句は

へどうどうたらりたらりら　たらりあがりらりどうというものです。これはチベット語ではないかとする説もありますが、よくわかりません。

チベット語であると問題を投げた人は河口慧海です。河口慧海は黄檗宗の僧侶で、仏典を求めて当時鎖国中のチベットに入国し、その体験を『西蔵探検記』として新聞に発表しました。

「翁」の登場人物はシテ、千歳（センザイ）、三番叟（サンバソウ）の三人ですが、この三人は白色人、黄色人、黒色人に扮していますが、これは何を意味するのでしょうか。面白いことです。

また、秘伝と称する演出上の約束事に、舞の中で、シテと小鼓が呼吸を合わせる箇所があります。シテは足の運びを一足毎に区切り、鼓のかけ声と共に踏み出すのですが、この時両者の呼吸の合わせ方には特別な秘儀・口伝があります。又、そのほか、舞ながら鼓のかけ声と同じ声（「ヤアーハッ」という）を発したりしますが、現代の「能楽」とはおよそかけ離れた仕儀があります。もうひとつ、「鈴の段」という部分では終始鈴を振り続けますが、鈴を振ることは神道ではお祓いのことであり、まったく宗教儀礼に他ならないことがわかります。

十一

次に「能」に弦楽器がないことも不思議なことであります。これは「能」の誕生のいきさつを物語るのではないかと推察されます。

管楽器の発生は口笛に、打楽器の発生は拍手に、弦楽器の発生は弓弦の震動などに求めることが出来るとする説がありますが、笛と鼓が人間の身体をそのまま使用することから始まったのに対し、弓弦は素材と加工道具が必要とされるので、発生の原点は他と異なり、またその時期も遅れると思われます。

従って「能」は弦楽器がまだ誕生していな

い古い時代の姿を今に伝えていると言えます。私は弦楽器を加えることで、音楽としては新しいジャンルを拓くことが出来たと思うのですが、敢えてそれをしなかったのは、拝礼作法を貫こうとした姿勢に深い意味が隠されていると見ています。

十二

古代の能は聖徳太子以来、時代を反映しつつ、且つ又変貌を遂げながら進むのですが、「道成寺」という曲に究極の能である「翁」の片鱗が秘伝として隠されています。道成寺というのは有名な安珍清姫の物語を題材にした「能」ですが、この中に「乱拍子」という部分があり、秘伝はそこにあるのです。

先に「翁」の舞に秘儀・口伝とされる箇所があり、そこではシテと鼓が呼吸を合わせると述べましたが、道成寺の「乱拍子」にも全くおなじものがあります。つまり、「乱拍子」では「翁」の舞が演じられているのです。その一つの証しとして、「翁」の舞と「乱拍子」は笛の譜が同じであることが挙げられます。

十三

「道成寺」の「乱拍子」を石段を上る仕草であると説明する人がありますが、とんでもない解釈です。

先に述べたように乱拍子は翁の舞を模倣しているのです。翁の舞の中の、シテと鼓が呼吸を合わせる最も緊迫した瞬間は、真剣勝負そのものであり、この気迫に満ちた雰囲気が武士階級に好まれた事は充分頷けます。

昔は道成寺以外にも「乱拍子」があり、「住吉詣」や「草子洗小町」にも「乱拍子」があったことが知られています。おそらくもっと昔は「乱拍子」はいろんな曲に応用されて、ふんだんに舞われていたのではないでしょうか。

十四

「能」が「翁」から出たことはよく分かりました。「翁」の誕生以来、長い年月を経たわけですが、絶滅の危機を乗り越えて、伝えるべき神髄をなんとか伝えて来たように思われます。

その神髄とは何か。それは「能」は「ノム」であり、宗教儀式であり、拝礼作法であるということです。

能舞台には頑なに、建築様式にこだわる伝統があります。「能」が演じられる能楽堂は、屋内にあってもさらに屋根を持ちます。これは「能」は拝殿で演じられるものという事を示しています。そのあらわれとして舞台の背面の壁を鏡板と云いますが、背景としては必ず松が描かれます。これは正面に植えられている松が鏡板に映っているという設定なのです。この松を鏡松と言います。鏡板に映っている鏡松の正体は「影向の松」です。「影向の松」とは神霊が天降る依代（神霊が降臨して依り憑くモノ＝通常岩や巨樹が多い）のことで、即ち神であります。

十五

このような環境・雰囲気のもとに演ぜられる「翁」の能をぜひご覧になるようお勧めします。「翁」をみることで「能」を知り、また日本文化を知ることができると思います。

一海君を悼む

三中・38回　高林　藤樹

畏友一海君が亡くなった。豫ねて癌を患っていたが、彼特有の頑張りで、大学教授としての活動を続け、最晩年では車椅子に乗って講演会を続けた。彼とは三中入学以来の友人で、親しくして貰ったが、彼は学業・研究に業績を挙げるのみならず、ユーモア溢れるその語り口は、講演会でも評判であった。又、酒席では文字通り「斗酒尚辞せず」と言う豪傑であったが、単に杯を重ねるだけで無く、シャンソンを歌ったり折り句に興じたりして、

向かうところ敵なしという有様だった。三人の令兄が皆靖国の鬼となったことに話が及ぶと「お袋の胸の内を思うとたまらない」と涙した。彼自身は海兵の七十八期である。謡曲の「歌占」に「指を折って故人を数うれば親疎多く隠れぬ」という件りがあるが、吟ぜずとも指を折ってしまう寂しい昨今である。

百十一才まで生きよう会

山城・11回　小渕　稔

千葉に移り住んで三十五年になります。首都圏には約千二百名の同窓生がおられます。残念なことに同窓会は、開催されなくなりました。

私達十一回卒業生は五十五名。毎年十一月十一日を「同窓会の日」と決めて三十四年続けて催しています。昨年は三十三名の方が出席されました。

また毎月第二金曜日には〝健康気功と食事の会〟を「いちいち会」と名づけて十年間続けて行っています。有志十名くらいが集まりワイワイガヤガヤ楽しんでいます。合言葉は「百十一才まで生きよう」です。会場は〝昭和の竜宮城〟といわれる目黒雅叙園の中で気功の会場からは富士山も見えるすばらしいお部屋です。気功体操で体をほぐし、おいしい料理をいただき、関西弁と関東弁をごっちゃにして情報交換をしながら至福の時間を共有しています。

思い出深いのは、あの三・一一の大震災の日が「いちいち会」の開催日でした。会を終えていつもの目黒駅のお店でお茶を飲んでいる時グラッと来ました。七名とも無事でしたが、忘れがたい出来事でした。

私達は今年後期高齢者の仲間入りをしますが皆さん若々しくヤル気マンマンです。素晴らしい余生を送りたいと願っています。

Road to Boston

山城・15回　伊藤　浩介

ボストンマラソンとは

70歳を記念に4年越しの念願だった第119回ボストンマラソンを走った2015年4月20日に。

ボストンマラソンはボストン市の郊外ホプキントンをスタートしてボストン市中心街をゴールに行われるワンウェイ（一方向）のフルマラソンである。コースは標高約150mのホプキントンから標高約20mの市内のゴール地点まで全体的には下り基調になる。世界陸上連盟が規定、認定するマラソンコースはスタートとゴールの標高差は1000分の1以内とされている。つまり42kmの1000分の1、42m以内でなければならない。標高差が120mあるボストンマラソンはこの規定を満たしておらずボストンマラソンの記録は世界記録としては公認されない。

しかしボストンのコースはスタートから27kmまでは小刻みな上り下りを繰り返しながら一旦標高約20m弱まで下り、そこから35km地点標高約80mまで、世に喧伝される「心臓破りの丘」(Heartbreak Hill)を駆け上がるというアップダウンの激しい地形でランナーにとっては良いタイムの出にくいコースである。

スタート標識

ボストン・クォリファイ

ボストンマラソンに私のごとき一般の、しかも高齢ランナーが参加できる様になったのは最近のことだ。70年まではエリートラン

ナーだけが走る特別なレースだった。少しずつ参加基準タイム（Boston Qualify BQとして知られている）が下げられ、近年は年代別にBQが設定され広く一般ランナーが参加できるようになった。エントリーを希望するランナーはボストン陸上連盟（BAA）が認定するレースでBQを取得するか、ランナーが所属する各国の陸連公認レースでBQを取得せねばならない。日本国内の大会でBAAが認定しているレースは東京マラソンだけである。

エントリーは前年9月第2月曜10：00（アメリカ東海岸時間）からインターネットで受付が開始される。

ボストンマラソンの定員は3万人。内訳は2万4千人がBQ取得者。6千人はスタート地点からゴールまでのコース沿道6市町の住民分として割り振られ、数百人分が旅行会社を通じての観光客ランナー分になる。前年の申込み開始日から当年の申込み開始前日までの1年間に達成した記録（BQ）が資格になる。申込み開始から最初の2日間はBQより20分速い記録を持つランナーだけがエントリーできる。開始からの2日間で定員に達しなければ次の2日間はBQより10分速いランナーが、さらに4日間の受付でまだ余裕があれば5日目からBQ達成のランナー全員が申込みできる。これをローリング・アドミッション方式という。

参加への準備は2年前から

私がBQを達成したのは2014年8月北海道マラソンで記録は4時間12分。私の年代のBQ（70～74歳）は4時間25分。よって私が申し込めるのは開始日から3日目。最初の2日間で定員に達してしまわないか不安だったが、3日目BAAウェッブページに書き込んだ私のシートは送信できた。直ぐに申込みは受け取ったと返信がきた。しかし、これでエントリーができたのではない。私は記録と達成の大会名、大会の英語ホームページを記載して送信したのだが1週間ほどして“貴方の記録を確認出来る英語表記の証明を送れ”とメールが届いた。北海道マラソンの記録を掲載したネットのページは日本語しかない。私は北海道マラソン事務局に掛けあって英語表記の記録証を作ってもらい、メール添付でBAAへ送信した。数日して“You have accepted into Boston Marathon 2015”とメールが届いた。2014年10月初めだ。申込みを送信して3週間経過していた。ボストンマラソンは申込み者全員の年代、BQを審査し2万4千人を選び出す作業をしているのだ。ちなみに2015年大会はBQより5分速い記録でエントリーは打ち切られた。3万人の参加者の過半は34歳以下、私の年代、70歳以上は213名しかいない。

一日に4つのレース

ボストンマラソンの開催は毎年4月第3月曜日と決まっている。この日はマサチューセッツ州の休日（Patriots Day 独立戦争勝利記念日）なので市のスクールバスを使ってランナーを市内からホプキントンまで輸送してくれる。ホプキントンでは京都近郊で例えれば周山のような長閑な町である。ランナーはホプキントン高校の校庭に張られたテントでスタートを待つのだ。

参加者

3万人のランナーは申込みタイム順（年齢は関係なく何分何秒と厳格に）で7500人ずつ4つのグループに分けられる。第一グ

ループ（Wave1）から第4グループまで各グループは25分間隔でスタートする。言わば一日で4つのレースがあるようなものだ。私は当然Wave4、Wave1が10時にスタートして1時間15分後に私のWave4がスタートする。

心臓破りの丘を目指して

Wave1がスタートする頃から雨が降り始めた。4月下旬とはいえアメリカ東海岸地方の気候は不安定で過去の大会で30℃近い高温の日があったり雪が降ったこともある。この日は10℃まで気温は下がった。冷たい雨の中でスタートした私の周囲は誰も飛び出す者はいない。概ね6分／kmのゆっくりしたペースで始まった。コース紹介に書かれていた〝25km過ぎまでの小刻みな下りを飛ばし過ぎてスタミナを浪費しないよう〟というアドバイスに従い自分のペースに合ったランナーを見つけ、つかず離れずで進んだ。Marathon Wayと表記された道路はゆったりした対向2車線。10km位までは人家も疎ら、時折沿道の人家ガレージから大音響の声援ロックミュージックが聴こえたりする。

マラソン通り

15km辺りから建物が連続し始め、大きな教会も目立ち、沿道の応援も多くなった。周辺は環境規制があるのか目立つ看板もなく美しい。

21km過ぎ、コースの中間点にウェルズレー女子大がある。卒業生にヒラリー・クリントン他有名人がいる名門大学だ。ウェルズレーの女学生の熱烈な応援はボストンマラソンの名物になっている。大学前の沿道3～400mにわたって女学生が大きな声援を送ってくれる。何人もが〝Kiss Me〟と大書した段ボールを掲げている。女学生にハイタッチしていくと一人に手首を掴まれた。ほっぺにキスしろというのだ。折角の厚意を無にする非礼はない。一人にほっぺを寄せると隣の子、またその隣とほっぺを出してくる。ここでの国際交流も大事だったがタイムロスも気になり、丁重に礼を言って列を離れた。

この日、旧知のアメリカ人夫妻がメイン州からボストンまで約300kmの道を私の応援に来てくれた。30年前、東京の私の隣家に住んでいたアメリカ人宣教師P・ベックウィス家族だ。レース前夜に再会し、地図を見ながら当日は私の家内共々ニュートン消防署から2マイルほど先、沿道右側で応援すると約束していた。ニュートン消防署は地図では30km辺りにある。ランナー向けの道路の距離表示はマイルとキロの二つがあった。走っていてキロの感覚は分かるがマイルの感覚が分からない。雨で道路端は水たまりがあるので中央を走っていたが右によりピーターとデビーを見つけようと探すが西洋人の顔が判別しにくい。それにニュートン辺りでは沿道の応援も密になっている。人を探しながら走るとそれはそれで疲れるのだがやっと女房の姿を見つけた。〝Itoさん、Good Job〟とデビーから声を掛けられ、3人とハグして再びレースに戻った。

この辺りはすでにHeart Break Hillに差し掛かっている。私の目標は最後まで歩かないこと、特に心臓破りの丘を走り切ることだった。そのため山道、坂道を走る練習もしてきた。自分自身に歩かない、走ると言い聞かせながら、目立ち始めた周囲の歩くランナーを尻目にとにかく走った。気が付くと35kmの給水ポイントが眼の先にあった。道路が平坦になっている。心臓破りの丘が終わったのだ。もうゴールまで上りはない。残りは7km。あるだけのスタミナ全開、全力で走った。マラソンで35km辺りは最も辛いところだ。「痛みは避けられないが、苦しみは考え方次第だ」と

村上春樹も30㎞を過ぎた終盤こそマラソンの真髄があると書いている。エリートランナーたちの勝負の仕掛けどこでもある。一人抜く度に沿道からワオーと声援が聞こえてくる。アドレナリンが出てもう痛みは忘れていた。

41㎞を越えた角を曲がるとゴールのあるボイルストン通りに入る。遠く直線の先にフィニッシュゲートが見えた。沿道は二重三重の人垣が出来ている。ゴールするのが惜しい気持ちにもなった。どんなポーズでフィニッシュするかを考えた。間違いなくカメラマンが待ち構えているだろう。そんなことを考えていたが気が付けば両腕を突き上げてゴールラインを越えていた。

筆　者

ボストンマラソンの優勝賞金は男女とも15万ドル（約1800万円）と魅力的だから世界のトップクラスが優勝を競う。一方、スタート時間をずらせることで市民レベルのランナーにも門戸が開かれ、誰でも頑張れば参加できるという目標にもなる。レースの後、街を歩いていて、地下鉄の中で見知らぬ人から何度も“Good Job”と声を掛けられた。日本のマラソン大会でよく見かける仮装（縫いぐるみを着たり、奇妙な恰好をしたり）は誰ひとり見かけない。それだけ参加者は皆真剣に走っていた。

全体の完走率は98％。80歳以上のランナーは11人がスタートし、全員が規定の6時間以内でゴールした。完走率100％はこの年代だけだった。私のゴールタイムは4時間11分25秒、全体で20745位、70歳以上213名中28位だった。

証明書

山城高校バドミントン同好会・誕生噺

山城・18回　高橋　博道

2学期はそろそろ長袖、山城の1年生坊主にも少しは余裕が出てきたようですね。許可を貰っての自転車下校はその殆んどが仁和寺街道を東へ帰ります。もう少しで西大路通り。椿湯の角辺りまでは来たでしょうか。「バトミントンやらへん？」

1年前と同じセリフのニコニコ顔は、仲良し同級生で石屋の息子、芳村伸男君です。

さて遡っては北野中学の3年生。

「俺バトミントン部に入ったけど、お前もやれよ。上級生はもう来～へんし、気楽やで。」バトミントン？（バドミントンとは云わなかったぞ）。

どうせ「ほな、行くえ～」の正月羽根突きに毛が生えた程度やろ。

まずは冷やかし気分で一度覗いてみる事となりました。

ところが……、「結構面白いやん。」

軽口から始まった我輩を右に左に翻弄し、完膚なきまでに叩きのめしたバドミントン競技のなんとタフな事よ。息も絶え絶えは、た

だただ降参するしかありません。

「良し、やってみようか。」

真面目に取り組んだ結果、持ち前の器用さ（？）で、なんとかお茶を濁せる程度までには上達。短い期間ではありましたが楽しくハマらせて頂きました。

ところが、入学した山城にはバドミントン部が無い。ならばいっそのこと作ってしまえ。というお話が始まった訳です。さて、どうすればいいの？

先ず①しっかりした練習場の確保と、②顧問（先生）、それと③文系も合わせた部長会議での承認。

以上をクリアすれば、まずは最初の3年間、同好会として活動ができる。ということでした。

【練習場】

競技の特性上屋内が必須ですが、体育館（現在のものとは違います）は当時細川先生の指導よろしき強豪のバスケとバレー部、さらにはツンタイ（辻先生）率いる体操部も使用していての寿司詰め満杯。諦めざるを得ません。ならば、と隣の控え所（と呼んでいたのはコンクリート打ちっぱなしでタタキ床の体育館）に矛先を変えました。

すでには卓球部がほぼ独占していたのですが、詰めて貰えば何とか2面確保できる。天井が低いのは我慢しよう。（あとあとハンデにはなりましたが）1年坊主ですからおそるおそる卓球部のキャプテンにお願いしたところ、二つ返事は逆に以外な拍子抜け。

「いいよ」。

優しかったですねぇ。快く半分譲って戴くことになりました。

【顧問】

「何もなさらなくて良いですから、どなたでも結構ですから。ご迷惑はお掛けしませんから。」

米搗きバッタのように職員室中を這いずりまわる坊主に絆されたのか、あるいはネをあげたのか。ついに優しい先生が顧問を引き受けて下さいました。大感謝です。

（しかし往時茫々50年。申し訳無いのですが、その先生のお名前を思い出す事が出来ません。失礼千万こそ本音の表れなのでしょうかね。）

【プレゼン】（そんなカタカナはまだ無かった）

一番の難関は部長会議です。

知り合いの先輩曰く、「特に文系のクラブに曲者が多い。余程しっかりした話でないとガンガン突っ込まれるぞ」勉強しましたね。

バドミントンの歴史から競技組織として今日までの沿革。まだ本格的スポーツとしての認知度が低い為（オリンピック種目からも外れていました。）、たとえば一試合に消費するカロリーの平均量は、あらゆる競技のなかでも漕艇に次いでの2位である、とか、まことしやかな情報？を集める一方、各部室へ参内しての根回しです。

さらには同時、たまたま運よくバドミントン男子の国別選手権はトーマス杯（日本は昨年悲願の初優勝を果たしました。）なるものが東京で開催中でした。どうせならポスターやパンフレットでも集めよう。

観戦の為、一人夜汽車に揺られもしましたよ。（昔は夜行の普通直行が1本ありました。）頑張りましたよね。

だから自信を持って部長会議のプレゼン壇上に上がれたんです。お藤様で満場一致にて承認。

嬉しかったですねえ。当然のことながら、やる以上は競技大会に出たいです。総体にも国体にも種目はあるんですから。

当時京都の高校バドミントン競技を仕切っていた朱雀高校のヤマチビ（失礼）こと山本先生を訪ねました。大歓迎をして下さったのですが、教わるに耳寄りな話が。

「山城やったら君達の一級上に中学チャンピ

オンのY君が居るやろ。やるの？」

彼は蜂ヶ岡中学出身なのでまったく存じ上げませんでしたが、「おい、頼も、頼も。キャプテンもお願いしよう。」ご自宅まで調べて何度も足を運びましたよ。

しかし真面目な先輩は受験準備を理由になかなかウンとは言ってくれません。

「今度の大会1回だけお付き合い下さい。」ストーカー紛いの押しの一手に根負けしたのか、三顧の礼に敬意を払って下さったのか、「分かった。でもキャプテンはせえへんよ。」ついに渋々重い腰を上げて頂きました。（嫌いな筈はないですものね）さあ整いました。ついに発足です。しかし彼は上手かった。

当たり前ですが、1年ちょっとのキャリアで勘違いしていた自分達とは次元が全く違う。お約束の大会でも一回戦総倒れの我々を尻目に、ひとり3回勝ち進み（ブランクが残念でした）、そして勇退されました。

怖いもの知らずのバイタリティーが功を奏したのでしょうか。良き仲間や優しい先輩。協力して下さった先生方にタイミング良く支えられての昭和40年は秋、山城高校バドミントン同好会誕生嘶の一席です。

近来はオグシオやスエマエペアの頑張り。ロンドン五輪のメダル等で誰もが認めるところのメジャーなスポーツになりました。（オリンピックの正式競技になる以前から日本は国際的に結構強かったんですがね。）

現役の方々には大いに頑張って頂きたいものです。

後列左から二番目が筆者

野菜作り雑感

山城・18回　寺島　竹夫

東京～仙台～山形～埼玉～広島と、単身赴任での転勤が多かった、住宅メーカーでの現役時代の仕事を離れて、早5年が経過し、終の住処として、15年前に新築した、埼玉県上尾市の自宅で、四季の移ろいを、ゆっくりと楽しめる年齢になりましたが、現在は、3年前から始めた畑での野菜作りに、すっかりはまってしまいました。

貸農園ですが、1区画30㎡の小さな畑を借りて農園主が、農機具や種を支給して指導してくれるという、気軽さから始めましたが、顔見知りも出来て、今では、すっかり土いじりが、ゴルフや旅行にも勝る楽しみになりました。

上尾の畑と収穫

現役時代から10年以上続けている、早朝ウォーキングが、いい相乗効果を発揮して、今では風邪ひとつひかず、医者いらずの健康体になりました。毎朝、5時に起床して、自宅から畑までの片道3キロ、往復6キロの、ウォーキングと、折り返し点での、畑での1

時間～2時間の農作業が、私の日課となっています。特に好きなのは夏場です。汗びっしょりなりながら、土に親しみ、カラスや虫とのバトルは、毎年のことながら、あまり苦にならなくなってきました。というのも、自然とはこんなものなのか…という気付きや、自然の有難さを、畑を通じて、感じるようになってきたからです。

野菜作りは子育てにも通じるものがあり、水や肥料のやり過ぎでの失敗や、逞しく根を張る生命力に目を見張らせられたり、と数多くの体験をしました。そして何よりも収穫の喜びは格別です。家内は、収穫時には率先して畑に来て、お裾わけに喜んでくれる友人や、ご近所への野菜を、せっせと収穫します。

筆者

又、朝夕の食事は完全に野菜中心となり、今では、すっかりベジタリアンに変身しました。これからも肩の力を抜いて、ゆったりと、時の経過を感じられるような生き方を、畑での野菜作りを通じて継続していきたいと思っています。

故テレサ・テンを偲び 台湾・玉山に登る

山城・18回　中尾　四郎

台湾は、九州ほどの面積ながら、標高三、〇〇〇mを超すピークを百以上擁することは、あまり知られていない。その最高峰が台中市の南に聳える玉山（三、九五二m）で、雪が消える五月に山仲間六人と山頂に挑んだ。偶然にもツアー期間中の五月八日が「アジアの歌姫」テレサ・テンの没後二十年で、彼女を追悼しての山旅ともなった。

玉山は台湾が日本統治下にあったころ、「新高山＝ニイタカヤマ」の名称で、当時の教科書にも「富士山より高い山」との記述があったという。日米開戦時の海軍の暗号電文「ニイタカヤマ　ノボレ　一二〇八」でも広く知られている。

ツアー初日は成田空港を飛び立ち、夕刻には台湾中部の山岳リゾート地、有里山のホテルに到着し一泊。

二日目は六時前起床。一行は全員が六〇歳代とおぼしき男六、女四のパーティー。これにツアーガイド、山岳ガイド、ポーターが加わる。山岳ガイドは台湾山岳協会の重鎮で日本語も流暢だ。天候にも恵まれ、二、六一〇mのタタカ登山口から入山。登山道は熱帯の樹林帯で整備が行き届き、ゴミもほとんど落ちていない。平日ながら入山者も多く、すれ違う登山者とは「加油」（シャーヨウ＝頑張れ）と挨拶を交わす。標高差八〇〇m、八・五㎞の距離をこなし、三、四〇二m地点にある山小屋「排山荘」で一泊する。山小屋は九四人の定員厳守で、夕食はカレーライス。アルコール類の販売もない。翌日の登頂に備えて早めの就寝。

山頂を目指し登山口に

三日目はいよいよ台湾最高峰を目指す。ところが、メンバー二人が高山病で登頂を断念、

山小屋で待機することに…。山頂でのご来光に合わせ、元気な八人で午前三時に出発する。小屋の指導で外国人登山者はヘルメット装着が義務らしい。満天の星空の下、歩き始めて一時間、私の体調が思わしくない。

台湾最高峰、玉山（左後方）の山並み

「時の流れに身を任せ」ていれば、いずれは山頂に到達するだろう、と歩行を続けたが症状は改善しない。どうやら高山病のようだ。ひょっとしたら登頂断念かと「別れの予感」が頭をよぎる。森林限界の三、七〇〇m地点、午前三時三〇分に、「安全優先」で下山を決意、ツアーガイドに伴われて山小屋まで戻る。「つぐない」の歌詞のように「すこし煙草も控えめにして」おけば、と思ったが、後悔先に立たず…。結局、時間と費用をかけた玉山登頂の野望は未達成に終わった。

だが、「高山病は下山すれば治る」のいわれ通り、下界に下りれば体調は完全回復。そうなると普通の観光ツアーで、台湾料理と紹興酒を味わう。奇しくも五月八日はテレサ・テン没後二十年、さらにメンバーに同日が誕生日の女性もいて、バースデーケーキがプレゼントされ、七人の台湾最高峰登頂のお祝いもあって大いに盛り上がった。ホテルの部屋に戻っても、NHK国際放送が「テレサ・テン特集」を放映しており、帰国後もついつい、テレサ・テンの歌詞を口ずさんでしまう始末。

台北市に戻ってからは故宮博物院、士林夜市、北投温泉などを訪問。玉山登頂はかなわなかったが、山とお酒と台湾料理を味わい、「アジアの歌姫」テレサ・テンの思い出を偲んでの山旅になった。

68歳のボウリング教室

山城・18回　中尾　四郎

「スコーン」――ストライクの軽快な音に歓声が場内に響く。ボウリング・ブームで沸いたのは今から五十年前、私達が山城高生の頃だ。卒業アルバムのスナップ写真にボウリング場を選んだクラスもあった。また、京都で最初に出来た鴨川ボウリング場では、舞妓さんが着物姿で興じるテレビニュースも記憶に残っている。

筆者はこの九月から近くのボウリング場が主催する「健康ボウリング教室」に六八歳で入門した。このスポーツ（というかゲーム）なら、体力、運動神経は不要でルールも簡単、多少の経験もあり、飽きずに長く続けられそうと思ったからだ。

参加者の平均年齢は六九歳、二十人余のメンバーに男性は五人であとは女性。なかにはビシっとしたウエアで決めた八十代の女性も…。

教室は「健康」と銘打つだけに、健康維持や認知症予防にボウリングの効用を説くなど、講義内容もバラエティーに富む。若い女性講師に「最近は物忘れがひどく、他人にカネを貸したのは覚えているが、借りたのは忘れてしまう。これは老化現象、それとも認知症？」と、意地悪な質問をぶつけてみたりもした。

さて、本番のゲームだが、若い頃のイメージとは程遠い状態。助走はふらつき、投球リリースも不安定。スコアは一〇〇点には程遠く、恥ずかしいやら情けないやら。それでも

ストライクが取れると仲間とハイタッチ、なかにはスキップで戻ってくるオジサンも。残りピンが1～2本の簡単な場面も、思うようにスペアが取れずガックリ肩を落とす人…。考えて見れば、この年齢になって「ワーワー、キャーキャー」と喜んだり落ち込んだりすることは殆どなくなった。これだけでも教室入門の価値がありそうだ。

マイボール、シューズ、ウエアも揃えた（殆どが主催者のプレゼント、つまり撒き餌）が、スコアアップは思うに任せない。だが、青春時代が甦り、同年代の仲間と一喜一憂し合えることは、このうえなく楽しいことでもある。年齢差、男女差がさほどないスポーツとあって、まだ十年は続けられそう。さはさりながら、ピンを倒す爽快感の反面、スコアがなかなか上がらず新たなストレスが生まれる、という点も付記しておきたい。

ストライクを出し女性スタッフとハイタッチ

同級生五人で初冬の越前旅行

山城・18回　中尾　四郎

思わぬ形で初冬の越前旅行が急遽決まった。山城同級生で「京美人三人組」の橋本春子さん、片野道子さん、稲本あや子さんが、新幹線開通で近くなった北陸方面への旅行を発案。それなら「関東山城組18」会長で、福井県立大学大学院に奉職する宇多川隆君の在任中に、越前を訪れることで話がまとまった。場違い筋ながら鞄持ち役で筆者も同行し、十一月末に同級生男女五人の「大人の修学旅行」が実現した。

雨上がりの永平寺門前にて

永平寺に単身赴任中の宇多川君に案内役をお願いし、JR福井駅に5人が合流、まず北陸の名刹、曹洞宗大本山「永平寺」を訪ねる。「弁当忘れても傘忘れるな！」の言い伝え通り、冬の日本海側は好天の日は稀で生憎の小雨模様。さはさりながら修学旅行気分の5人は、久方振りの再会を喜び、小雨に煙る名刹の境内を厳かな気持ちで拝観、道元禅師の偉業に感銘しきり。

続いて、往時は「北の京」と称され栄華を極めた越前一乗谷の朝倉城遺跡を見学、「強者どもの夢」に思いを馳せる。夜の帳が下りると、お待ちかねの小宴。食の宝庫、福井・越前の料理と地酒を味わう。山城を卒業して五十年、この地で元気に再会できたのも、母校の絆が有ればこそ…。呑むほどに酔うほどに話題も弾み、徒歩十分のホテル帰還もタクシーのお世話になる始末。

越前海岸・雄島を結ぶ橋上で